

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

てん ぞ
典 座

平成28年9月第1週放送

「典座」は、禅の修行道場で、一般の家庭でいうところの“台所”を担当する役職を指す呼び名です。

典座は、大勢の修行僧の食事に関わる、とても責任の重い役です。食事は、一人一人の健康管理につながり、皆が元気で修行ができてこそ、大きな道場全体の修行が成り立つのです。

禅の修行道場は、人が多く集まり一緒に生活をする環境です。お互いに協力し合い、助け合うことが道理といえましょう。修行道場では、個人個人がそれぞれの役目を全うすることが大切です。その大切さを、道元禅師は「典座」という役職の僧侶である典座老師に教えられ、坐禅を行うことや経典を学ぶことだけでなく、日常の行い全てが修行であることを気付かされ、目が覚める思いをされたのです。

宋の国に渡る際、寧波という港で船に留まっていた時に、桑の実を買いに船に乗りこんできた、阿育王山で修行をしている典座老師との出会い。また天童山の修行に入ってから強い日差しのもと海藻を干している典座老師との出会いもありました。このお二人の典座老師との出会いの際に道元禅師は、「その様な仕事は若い修行僧に任せてはいかがですか」と尋ねてしまい、「典座」という役職の責任の重さと修行とは何かを厳しく諭されてしまいます。

この時のやり取りを深い反省として心に留め、日本に帰ってから多くの修行僧に戒めとして修行道場での調理に携わるものの心得として『典座教訓』をお示しになりました。

さて、翻って私たちは、自分の失敗を素直に認めて反省し、注意されたことを率直に受け入れることができるでしょうか。

『典座教訓』の中で道元禅師は、典座に限らず修行僧の心得として、

- 「喜心」、喜んで役職にあたる。
- 「老心」、相手の身になって親が子を思う様に接する。
- 「大心」、大きな山、大きな海の様な偏りの無い心で人を導く。

ということが大切である、と説かれています。

私たちの普段の生活にも通じるお示しではないでしょうか。

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

さらに道元禅師は、食事を頂く側の作法を示した『赴ふ粥しゆく飯はん法ぽう』という書物も著あらわされています。

たとえ一人での食事であっても、たくさんの食材の命を頂いていることに思いを致し、感謝の気持ちで調理をし、有り難く頂戴したいものです。

— 終 —